

2023年4月30日 礼拝メッセージ

「共に在り、共に有る」

岡嶋千宙伝道師

聖書 使徒言行録 2章 42-47節

先日、あるニュース番組で、3月に卒業し、4月から社会人となった人たちへのインタビューが行われていました。そのうちの一人が語った言葉。とても印象的でした。「入社してからの一週間で、今までの人生で一番苦しかった」。学生時代、コロナ禍によって、オンライン中心の生活を送っていた10代、20代の人たち。この春に卒業して、社会人となり、学校とは異なる職場という新しい環境に入った途端、挨拶の仕方から何から、あらゆることがオンライン生活中心だった頃とは全く異なる対応を求められる。そのギャップに、苦しんだとのことでした。もう一つ、別のニュースで伝えられていたこと。春の心の有り様を伝える言葉として、「5月病」あるいは「皐月病」というのは前から知られていますが、近年「4月病」という言葉も使われるようになってきているそうです。新しい年を迎えて、新しいことにチャレンジしたいという思い、あるいは新しい出会いや新しい環境への期待。その期待や思いが強すぎて、ついつい無理をしてしまう。この時期特有の、花粉症や、乱高下する気温という外的な要因もあり、5月を待たずに体調を崩す人もいるとのこと。新生活をはじめ、新しい関係を築き上げていこうとしたのに、体調を崩してしまう。上向きになれば良いけれども、場合によっては回復できないこともあって、そうなる、せっかく築き始めたつながりが崩れてしまうこともあります。周りの人たちと同じ歩みができなくて、取り残され、孤独を感じる。誰かと一緒にいることに失敗した自分が惨めに思えて、苦しくなる。新年を迎える時期に限らず、誰もが、感じたことがあるのではないのでしょうか。誰かと一緒にいる、同じ時と、同じ場を共有する。実は、思っている以上にむずかしい。そもそも「一緒にいる」、それ自体をじっくり考えてみると、わからなくなる。一体「共にいる」ってどういうこと？ 本日は、復活のイエスによって新しい命を与えられた初代教会の人たちの生活の有り様を描く御言葉をもとに、「共にいる・共に在る」ことの謎に迫ってみたいと思います。では、「世界、ふしぎ発見！」

誰でもよいのですが、たとえば、家族、友人、職場の同僚、あるいはお店の店員でも良いので、誰かと一緒にいる場面を想像してみます。今わたしたちがいるこの場所、礼拝も誰かと一緒にいる場のひとつです。対面にせよ、オンラインにせよ、それぞれの仕方で、礼拝を守るという目的で集い、同じ時を過ごしています。礼拝では、賛美歌を歌う、聖書を読む、お祈りをする、あるいは、聖書のメッセージを語る／聞く、さらに、ピアノやオルガン、ヒンプレーヤーなどの音を奏でる／音に耳を傾ける、など、何かしらの行動をとっています。対面の方であれば、礼拝が終わったあと、一緒にお茶菓子をいただいて、近況報告をして、お掃除をして、という行為も

それに含まれるでしょう。礼拝に集うとき、わたしたちは、意識しているわけではないけれど、それら一連の行動を取るべきだ、それがふさわしい礼拝でのあり方だ、と感じているのではないのでしょうか。礼拝でなくても、同じです。誰かと一緒にいるとき、互いに何かをしあう、そこに一緒にいる人のために、あるいは一緒にいる人たちとの良好な関係を保つために、特定の行為をしようとする。そうすべきだ、と感じている。「人」と一緒にいるときだけではありません。わたしの家では犬を飼っていて、わたしとしては、その子が一緒にいてくれるだけで大満足です。何もせずにただ隣にいたい。でも、ココという名前のその子は、わたしが隣にいただけでは満足できないようで、いつも、さすって～と訴えてきます。めんどくさい、と思うこともあるけれど、こちらとしては一緒にいたいから、さする。一緒にいるために、「さする」という行為をしてしまう。このように、わたしたちの日常においては、「共にいる・共にある」ということが、互いに何かをする、何かをしあうということと結び付いています。「ある」と「する」とがセットになっているのです。

本日の御言葉にも、「する」という言葉がたくさん用いられています。復活前のイエスと共に生活をしてきた人、復活した後のイエスに出会った人、イエスには直接出会っていないけれどその人たちからイエスのことを聞いた人、そんな人たちから構成されていた共同体。その規模は少なくとも 3000 人以上。異なる文化、生活様式、言語、思想を持った雑多な人たちから成っていた共同体の特徴が、「何かをする」という意味を持った言葉によって記されているのです。聖書協会共同訳に従って見てみます。42 節「教えを守る」「交わりをなす」「パンを裂く」「祈りをする」。43 節「不思議な業としるしを行う」。44 節「共有する」「売る」「分け合う」。45 節「神殿に集まる」「パンを裂く」「食事を共にする」。46 節「神を賛美する」。これを見ると、神の共同体、復活のイエスによって形作られた信仰共同体とは、「何かをする」共同体なのだという印象を受けます。それは「ヤコブの手紙」2 章に「行いの伴わない信仰はない」という旨の言葉が遺されていることから、決して間違いではないのでしょう。間違いではないどころか、そうであつたらどれ程素晴らしいか、と思えるほどです。特に、44 節と 45 節の描写。とても美しい。聖書協会共同訳でもよいのですが、その美しさを味わうために、岩波翻訳委員会の訳で見てみます。「信じた者たちは全員一団となっており、いっさいのものを共有し、土地や持ち物を売っては、誰かが不足したときにはいつも、それを皆に分配した。」素敵です。世界全体でも、それぞれの国や地域でも、格差が拡大する現状に歯止めがかからず、加えて、温暖化などの気候変動の影響で一人一人に割り当てられる資源が減少していく今の世の中で、ここに描かれた共同体のあり方は、強いインパクトをもって響いてきます。飛び付きたくなる。真似てみたい。でも、現実は何ほど遠い。当時の共同体でも、おそらく同じだったのでしょう。小規模で、背景を同じくする人たちで構成されている間はよかったけれど、規模が大きくなり、様々な異なりを持つ人たちが日に日に増えるなかで、誰もが過不足なく満足して過ごせる

共同体というのは、現実的ではなくなっていくのです。本日の箇所の後、「使徒言行録」5 章では、アナニアとサフィラという一組のカップルが、共同体のあり方に反する生き方をしたために咎められています。ほころびは、初めのうちからあったのです。問題は、ほころびが生じたときに、どう対処するか。もちろん、アナニアとサフィラの例がすべてではないのですが、「使徒言行録」の記述によると、このとき、共同体の理想に反する行いをした人たちは、排除されています。二人は、共同体のリーダーたちに咎められたあとすぐに、死を迎えたのでした。この結末、個人的にはしっくりきません。だって、何かをすることができない人、求められることをできない人、物理的にはできるけれど、様々な状況下で、様々な要因によって、現実にはできないという人もいるはずです。土地や持ち物を売ることができない。何かを共有することができない。神殿に参ることができない。食事を共にすることができない。祈ることすらできないことだって。そんな人がいたとしたらどうするのか。イエスの復活後に形成された当時の共同体の中にも、そんな人たちは確実にいたはずです。そういう人たちは、排除されるのでしょうか。いらないのでしょうか。いてはならないのでしょうか。存在を消されるのでしょうか。死ななければならぬのでしょうか。

「共にいる・共にある」という関係が、「共にする」ことに目が向けられ、何かをすることだけによって維持されるようになるとき、人の命、存在が、ないがしろにされます。それは、イエスを信じる者たちが形作る共同体においても同じです。だから、本日の御言葉をもう一度、丁寧に見てみます。42 節と 46 節にある「ひたすら」という言葉。「何かをする」という行為を示す言葉がたくさん用いられている箇所であって、それらに先立ち二度にわたり記されている言葉。日本語ではわかりづらいのですが、この言葉自体、先にみた行為を示す言葉たちと同じ「動詞」です。ですが、他の言葉たちとは違って、この「ひたすら」と訳されている言葉は、何かをするという行為ではなく、「こうである」という状態を示す動詞なのです。その意味は、「ある状態に居続ける」「同じ状態に留まる」ということ。では、留まっている状態、同じ状態とは何かというと、44 節「信じた者たちは皆一つになっていた」。「一つになる」という表現に用いられているギリシア語は、「ある」という意味の動詞です。英語で言えば、be 動詞。何かをする、という動作ではなく、存在を表す「ある」。さらに、46 節では、「ひたすら」という言葉のあとに「心を一つにして」という表現が用いられています。これは、同じ状態にあるということが、単に身体的な意味ではなく、精神的、霊的にも共にあるということを伝えています。行為を示す様々な言葉に先立ち、「同じ状態であり続ける」という動詞が使われ、それを受けて「共にある」という状態が、ただ物理的なだけではなく、霊的にもそうであることが伝えられている。ここから導きだされるのは、イエスを信じる共同体、復活のイエスによって作られた信仰共同体とは、何かをする、ではなく、「共にある」共同体だということです。だとすると、数多くあげられている様々の行為、祈る、パンを裂く、売る、所有す

る、分ける、などは、それがなければ共同体が成立しないというものではなくります。これらの行いを必ずしなければならぬという義務でもなく、これを目指すべきだという理想でもありません。あくまで、一つの例として挙げられているに過ぎません。「共にある」共同体が示す姿は、他にもあり得ます。ここに列挙されたこと以外で、共にある者たちが、何かをし合うこともできるのです。そもそも、何かをすることすら、必要ないのかもしれませんが。人間の目には何かをしているようには思えなくても、一人ひとりが「ここにいる、ここにある」、そのことが共同体に命を与え続ける。「いる」「ある」「生きている」。一人ひとりの命、一人ひとりの存在が大切にされ、そこにこそ価値が見いだされる共同体。イエスが求め、わたしたちに伝えた教会の姿。

それなのに。「自己責任、生存競争、生産性」。何かをなすこと、何かを産み出すこと、数値に見える形で貢献することが良しとされ、ますますその傾向が強くなり、その反動で個々人の命がないがしろにされる社会に生きるわたしたち。忘れてしまいます。一人ひとりの存在の価値と意味を。自分を、他者を、「何かをする」「何かを産み出す」「何かで貢献する」ことに追い込み、それがうまくできない他者を、自分を、排除してしまいます。存在を消してしまいます。この世界のどこかで、苦しんでいる人がいます。確実にいます。誰かと共にいることに耐えられない。社会が求めること、みんなが求めることができなくて、何も貢献できなくて、できないことを咎められるのが怖くて、一緒にいられない。逃げたい。もう逃げている。そんな苦しみを負っている人がたとえ一人であってもいる。それこそ、間違っている。わたしはそう思います。そして、それは、復活のイエスが望み、わたしたちに伝えてくれた世界のあり方では決してないということも。だから、変えたい。誰もが、その人自身の姿で生きることを、存分に味わうことのできる世界を築いていきたい。そうは思うものの、もしかしたら、このメッセージを語るわたしが、誰かに苦しい思いをさせている張本人なのかもしれません。今はそうでなくても、この社会の流れに抗うことができずに、いつか苦しめてしまうことがあるかもしれません。その可能性を完全に否定することはできません。そうであったのなら、いくら謝っても謝りきれないし、どんな言葉を紡いでも、どんな行いを重ねても、傷つけた事実を消し去ることはできないし、つけた傷を癒すことはできません。だから、せめて、今。復活のイエスを通して、そのイエスが伝えてくれた言葉を通して、気づかされた一人として伝えたい。この場に集っているみなさんに。インターネットで繋がっているみなさんに。そして、今後、何かしらの方法で、このメッセージに触れてくれるあなたに。わたしたちの真ん中において、一人ひとりを、愛の内に温かく包んでくれるイエスが伝える言葉。イエスの思い。「あなたが、今、生きてくれてありがとう」、「今、わたしと共にいてくれてありがとう」。